



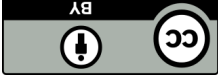
Storybooks Canada

storybookscanada.ca

ロバート

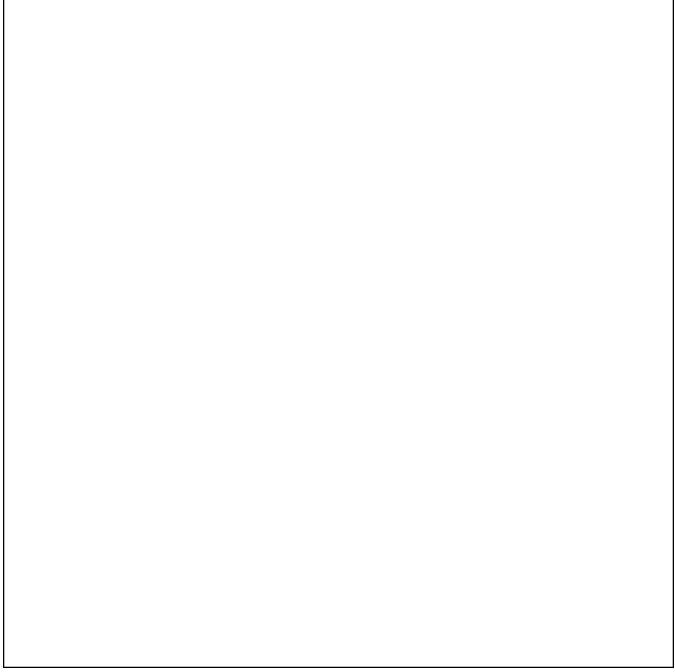
Written by: Lindiwe Matshikiza
Illustrated by: Meghan Judge
Translated by: Yuka Makari

This story originates from the African Storybook (africanstorybook.org) and is brought to you by Storybooks Canada in an effort to provide children's stories in Canada's many languages.



This work is licensed under a Creative Commons [Attribution 4.0 International License](https://creativecommons.org/licenses/by/4.0).
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0>

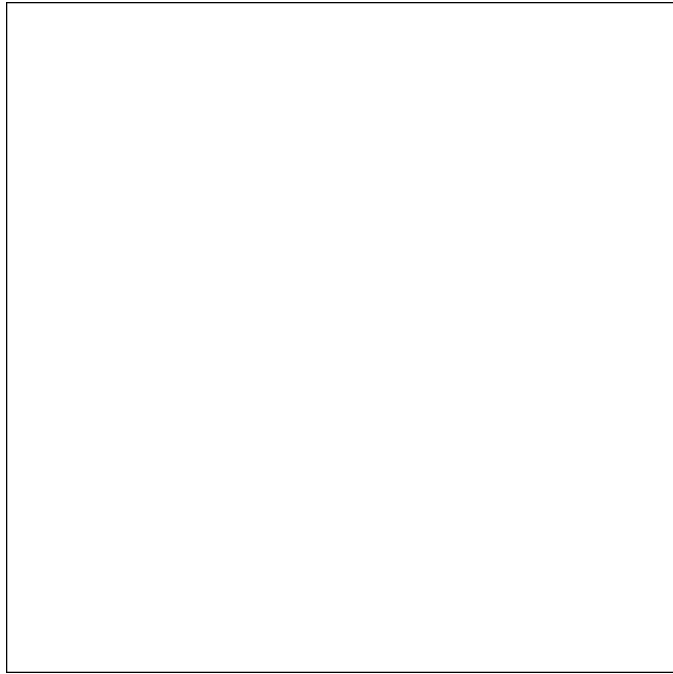
ロバート



✎ Lindiwe Matshikiza
👤 Meghan Judge
📖 Yuka Makari
🗣️ Japanese
📖 Level 3

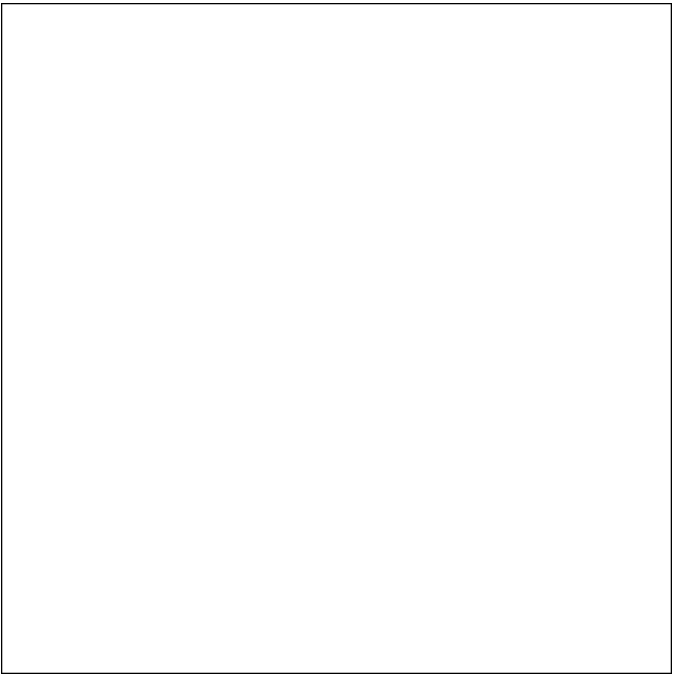
(imageless edition)

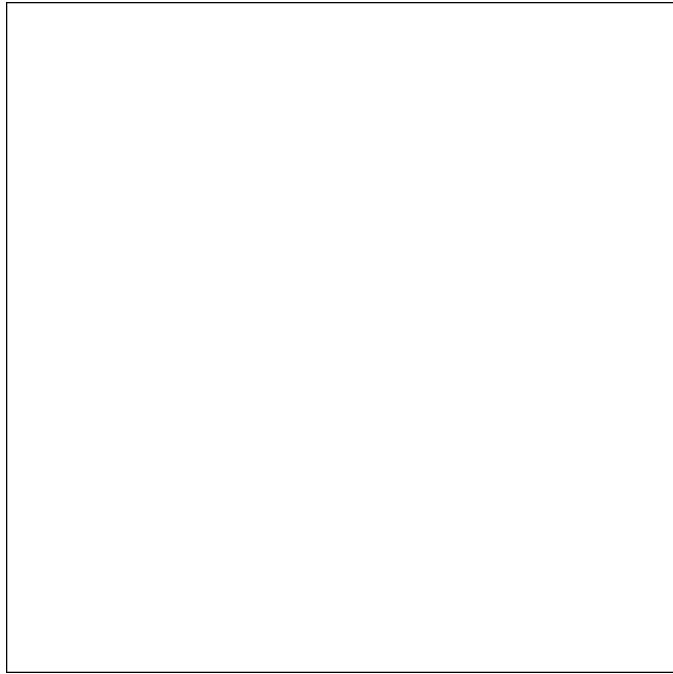




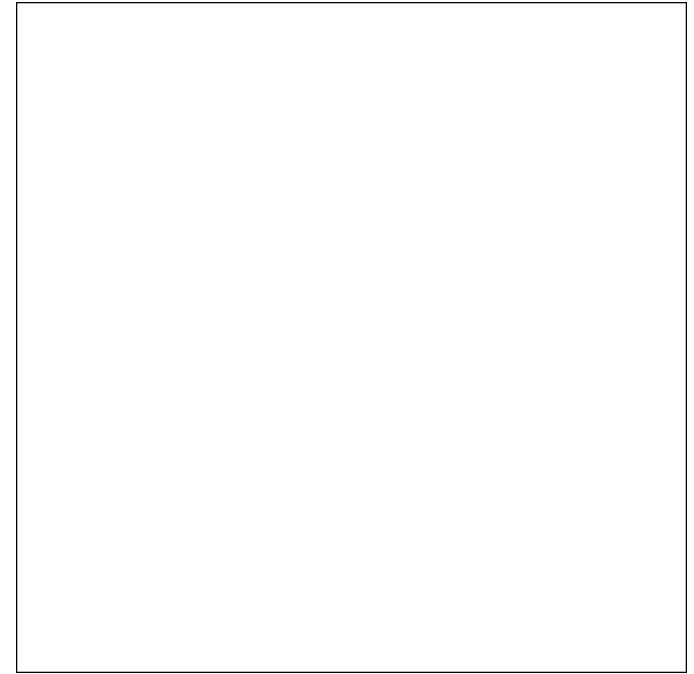
ある日のことです。小さい女の子が遠くの
ほうに不思議な形をしたものをを見つけまし
た。

その形が近づいてきたとき、女の子は大きなお腹をした妊婦さんだと気が付きました。





その女の子は恥ずかしがりやでしたが、勇気を出して妊婦さんに近づきました。女の子や女の子の家族たちは、その妊婦さんをしっかり守ることに決めました。

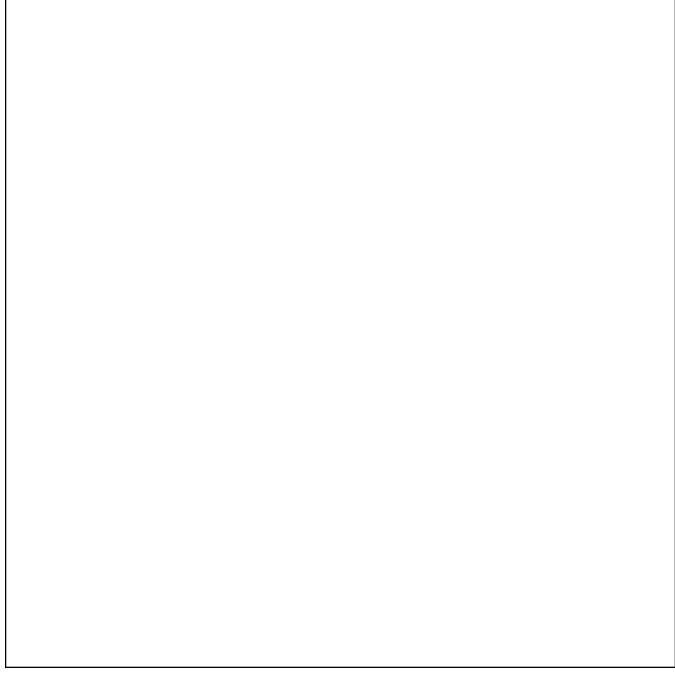


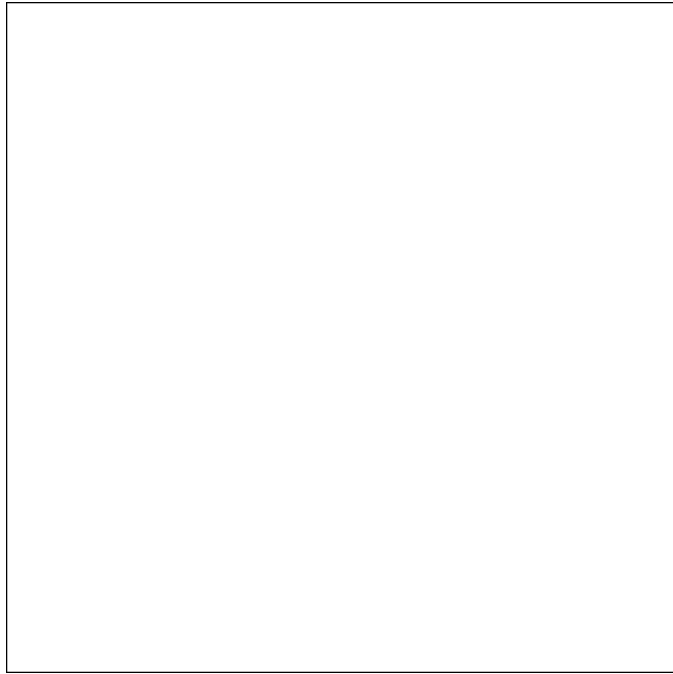
ロバと彼のお母さんは一緒に成長し、暮らしていく方法をたくさん見つけていきました。ゆっくりではあるけれど、周りの家族も徐々に彼らのことを受け入れていきました。

ロバは、息子を失って悲しみにくれていた。彼
お母さんを見つけることができた。彼
らはお互いに長く見つめあい、そして強く
強く喜び、抱きしめあいました。

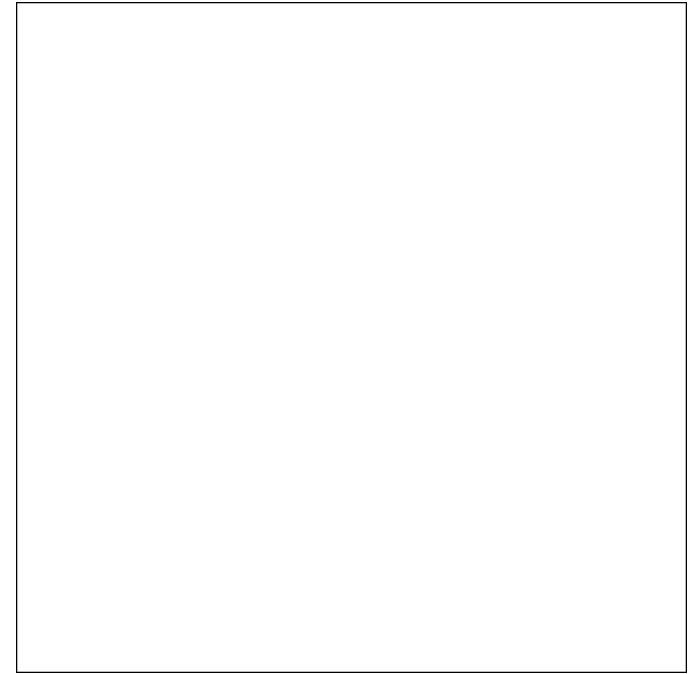


赤ちゃんは今にも生まれそうです。みんな
カ彼女を助けました。「押すんだ！」「毛
布をもってきて！」「水をちょうだい！」
「押して————！！！」



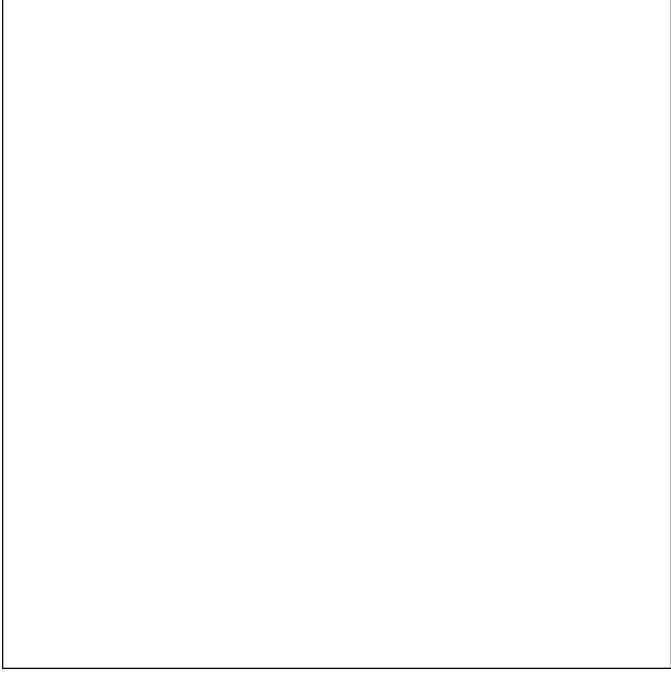


しかし、赤ちゃんが出てきたとき、彼らは
驚き飛び跳ねました。「ロバ?！」

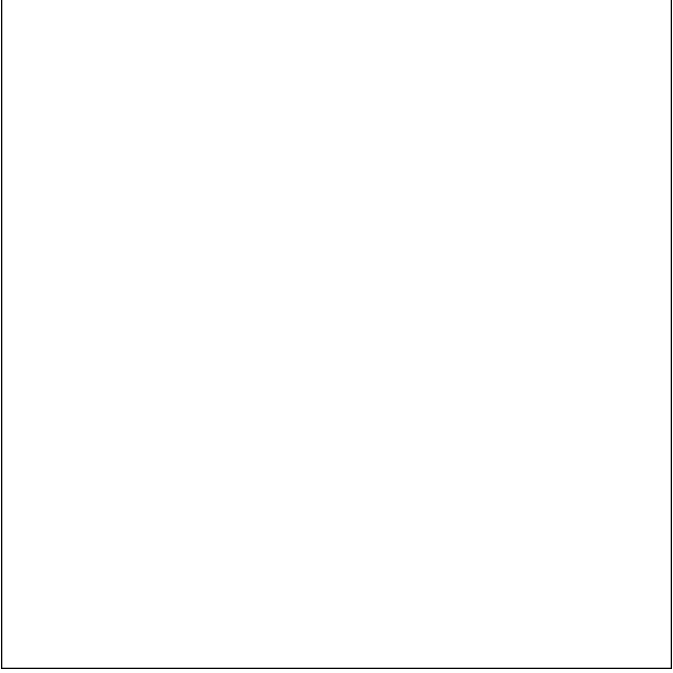


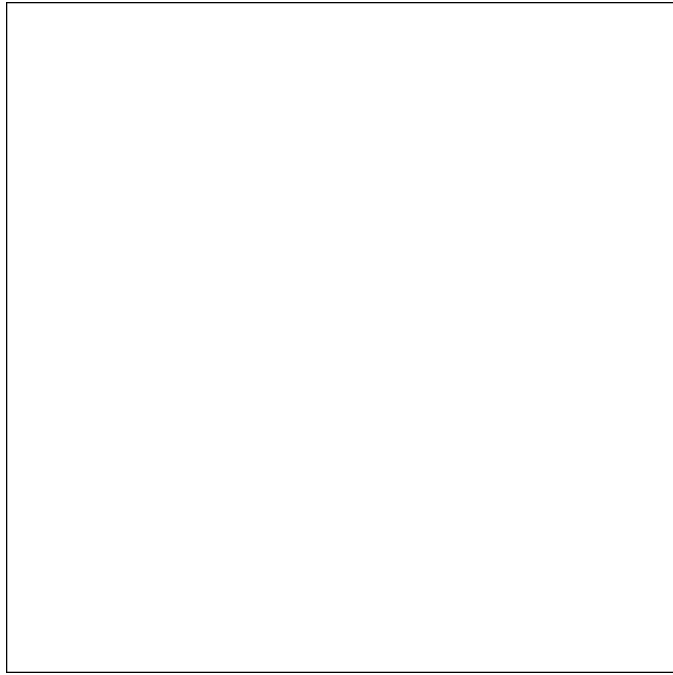
ロバはついに自分がどうするべきかがわかり
ました。

ロバが起きたときには、雲も、親愛なるおじいさんも消えてなくなっていました。

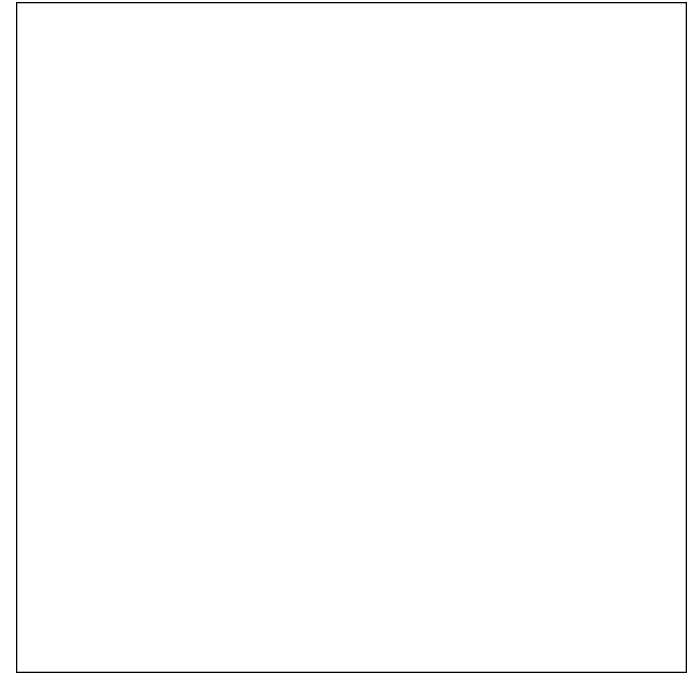


みんなは「私たちは彼女のことも赤ちゃんも守ろうと決めて手助けをしたけど、彼らは私たちに悪い運をもってくるに違いがない」と言い始めました。



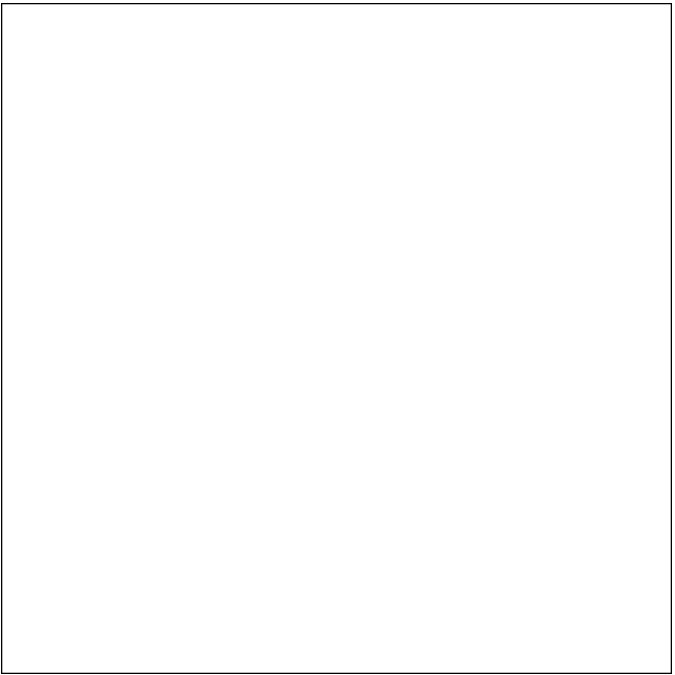


彼女はまた一人ぼっちになってしまいました。彼女はこのかわいそうな赤ちゃんをどうやって育てればいいのか、自分はどうするべきか、わかりませんでした。

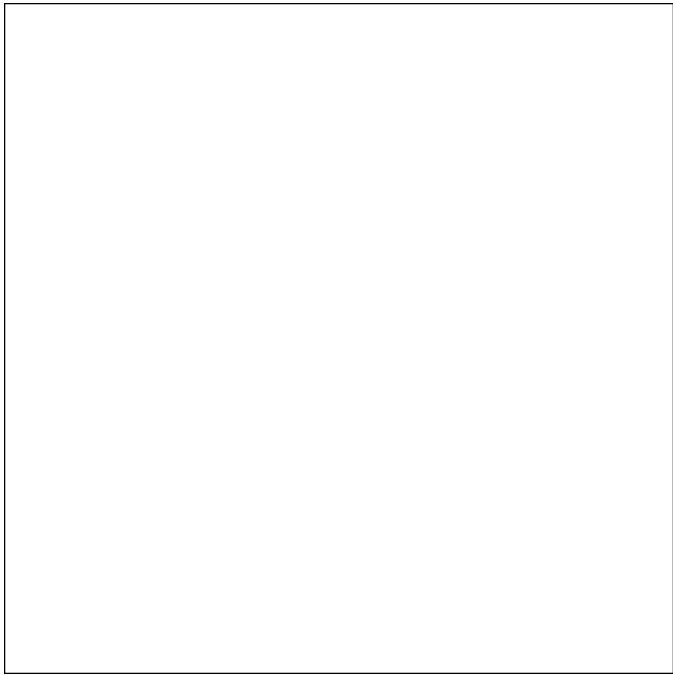


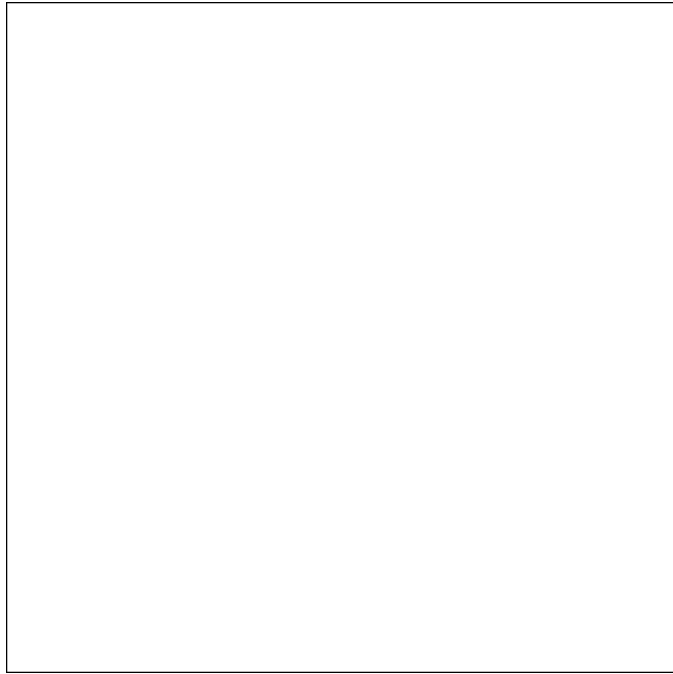
彼らは雲の上で眠りに落ち、ロバはお母さんが病気になり、自分のことを呼んでいる夢をみました。

しかし、彼女は、ロバが自分の子どもであり、自分はロバの母親であることを受け入れなければなりませんでした。

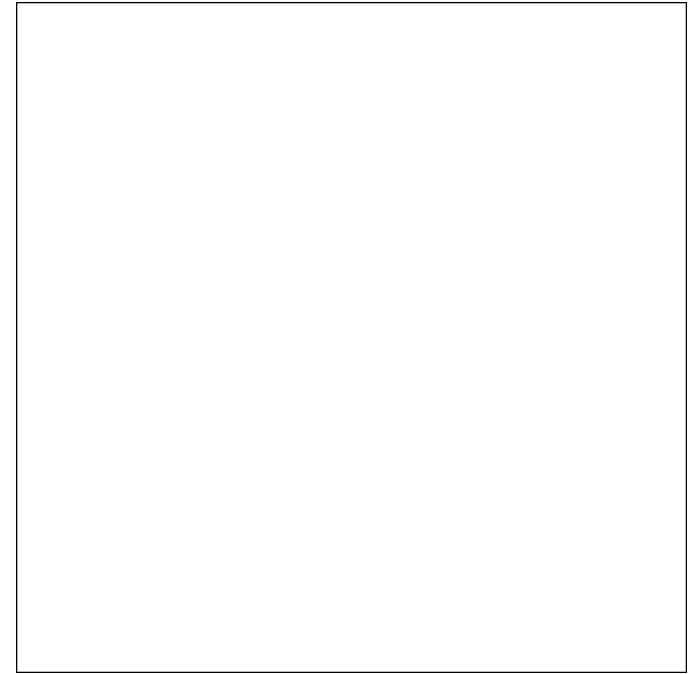


ある朝、おじいさんはロバにのり、山のてっぺんにつれていくようお願いをしました。



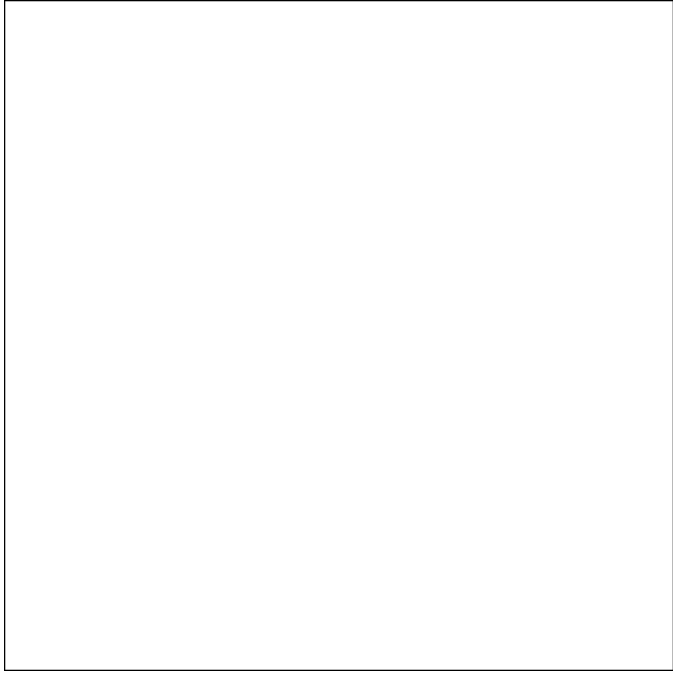


その子どもが小さいサイズのままであれば、すべては違っていただいでしょう。しかし、そのうちにその子どもは彼女がおんぶできないくらい大きくなってしまったのです。そしてその子はどんなにがんばっても人間と同じ行動ができるようにはなりません。母親は疲れ、イライラして、自分の子どもを動物に接するように扱いました。

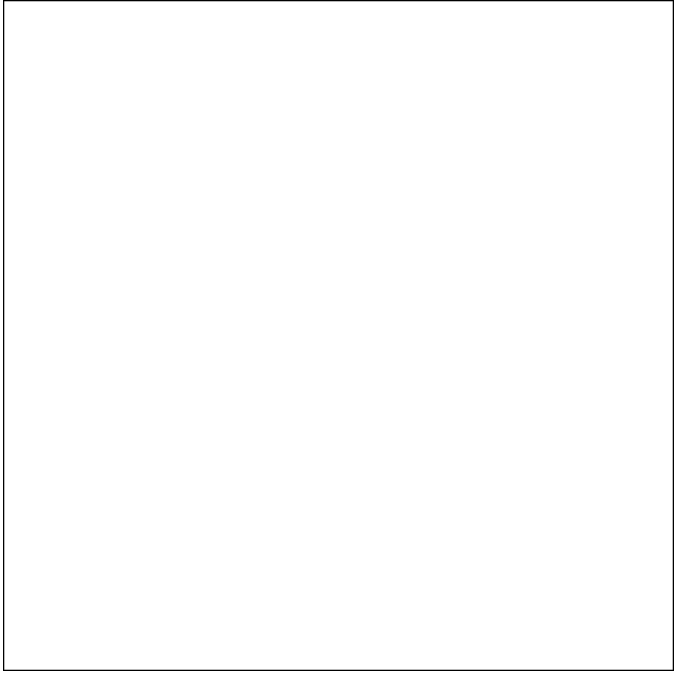


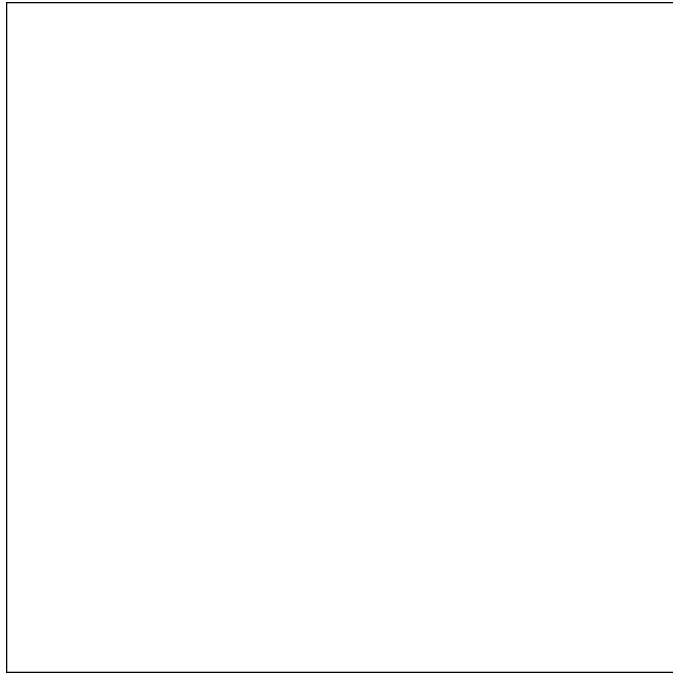
おじいさんはロバに生き抜くためのたくさんの方をを教えてくれました。彼はその教えをよく聞き、学びました。彼らはお互いに助け合い、笑いあって時を過ごしたのです。

ロボが起きたとき、そこには知らないおじいさんがロボをじっと見つめて立っていました。すると、おじいさんの瞳の中に小さな希望の光をみつけたのです。

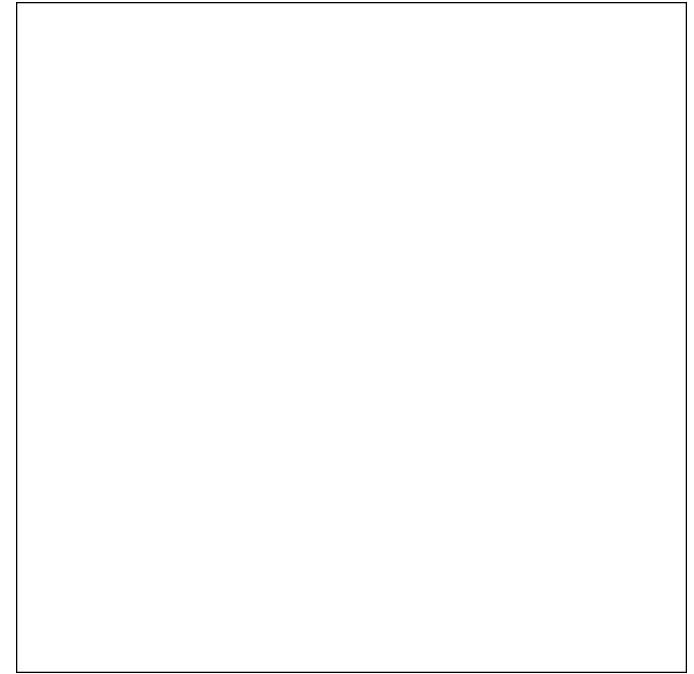


その怒りやストレスはロボの中にどんどんたまっていきました。ロボは人間と同じことはできないし、人間のようにはなれない。あまりにたまった怒りから、ついにはロボはお母さんを蹴ってしまいました。





ロバは自分のしたことに対し恥ずかしい気持ちでいっぱいになり、精一杯の速さでその場から走り去ってしまいました。



気がつくあたりはすっかり夜になり、ロバは道に迷ってしまいました。「ヒヒーン…」彼は暗闇のなかささやきました。「ヒヒーン…」それは後ろにこだまただけでした。彼はひとりぼっちでまるくなり、深い、悲しいねむりにつきました。